

## 人材養成の場としての目録システム講習会を考える

高知大学附属図書館 中村千都世

### 1. はじめに

この十数年来の学術情報の増大，技術の革新，インターネットの普及などによって大学図書館をめぐる環境は大きく変わりつつある。更には改革が叫ばれる大学自体の変容や予算の減少，為替レートの変動，定員削減による人員の減少，欠員の一般職による補充など，社会的な要因によっても大学図書館の運営はより複雑な様相を見せるようになってきている。

そのような中で目録業務というものを考えるとき，人材の育成ということが緊急かつ重要な課題であるのではないのかと考え，講習会や研修のあり方といったものを考察してみた。

### 2. 21世紀がやってくる！！

それはある日を境に突然世の中が変わるといった変化ではないだろうが，現に今，私たちが5年，10年前を振り返ったとき感じるような大きな変化がしばらくの間は続くのではないだろうか。

学術情報センターにおいても1984年来運営してきた目録所在情報サービスのシステムが，2004年までに新システムに移行される。

Windows 95の出現を機にまたたく間にインターネットが広まり，今や多くの大学図書館がホームページを持ち，電子ジャーナルの利用，OPACの公開はもちろんのこと，学位論文や貴重資料の全文データベースを作成している図書館もあり，いっきに電子図書館化の様相を見せてきた。技術の革新による情報化への対応という問題は，近年の図書館における最も大きな関心事であろう。

しかし，大学図書館の抱える問題がすべて技術的な方策によって解決できる訳ではなく，より基本的，本質的な要素はかえってそれによって目隠しされてしまっている感がある。

このように10年後の環境を想像することさえ困難な複雑な時代であるからこそ，変わり行くシステムと普遍的な理念について考察し，システムの利便性が増すことによる業務の特質の変化を見直して整理する必要がある。更に新しい情報技術により得られる利点だけを展開しようとするのではなく，これまでの図書館が行ってきた「紙の図書館」の任務をしっかりと果たし，その守備範囲をより高度な電子図書館といった方法で展開していくといったシナリオが必要であろう。

例えばコレクションの形成や図書館全体としての活動方針，人員の養成，配置といった問題等には長期的な計画や研修などといった取り組みが重要である。高度化する学術情

報システム的环境に対応し得る知識と技術を習得し、新たな状況を踏まえて構想を展開し、それを実現することの出来る優れた人材が図書館に確保されなければならない。

今、21世紀を目前にして、今後の百年を見晴るかすともいった大きな展望を持つことが必要であるかもしれない。

### 3. 新 CAT の時代

今回の研修において、新 CAT/ILL に関する講義をいくつか受講することが出来た。また、いくつかのクライアントを実際に見ることも出来たし（まだ順調に機能していないものもあったが）、研修生の中には実際に新システムに移行した大学の職員や、リプレースで近々移行する大学の方もいらしてお話を伺うことが出来、大変興味深かった。

これから数年の間は新システムへの移行についての議論が盛んになるであろうと思われる。また、目録システム講習会にも大きく関わってくると思われるので、ここで新 CAT/ILL の概要に少し触れてみたい。

#### 新 CAT/ILL について

NACISIS-CAT システムが運用を始めて十数年がたち、この間情報システム的环境は大きく変化した。ハードウェア面ではダウンサイジング、ソフトウェア面ではオープンシステム化、クライアントサーバ型のシステム、そしてグラフィックユーザインターフェース（GUI）といった潮流が一般的なものとなってきている。図書館システムも90年代にはいりこれらの新しい流れは無視できなくなってきた。

また、目録所在情報サービス参加機関の増大や遡及入力業務の増加などによる急激な利用者増への対応、多言語資料への対応などの要望もあり、これに合わせてセンター側のシステムである NACISIS-CAT/ILL も新しいハードウェア、ソフトウェア環境に合わせたものとして変化せざるを得なくなってきた。

センターでは1997年4月のサービス開始に向けて、新しい目録所在情報システムの開発を行ってきた。このシステムでは現行のシステムとは異なる新しいプロトコルを開発し採用している。その設計思想の第一はユーザ側でのシステムの利用に出来るだけ自由度を持たせることにある。従って、ユーザ側においても新しいクライアントシステムを作成する必要があり、その際、従来のローカルシステムと目録システムとの統合はもちろん、インターネット時代に即した新しい図書館サービスを視野に入れたクライアントシステムを構築することが期待されている。

#### 新システムの機能

- (1) JIS X0221 の採用
- (2) 自動登録インターフェイス
- (3) 作業対象ファイルの設定機能
- (4) フルタイトルキーの作成
- (5) 重複書誌作成抑止機能
- (6) データの二重保持の解消

## 新システムで何ができるのか

### (1) 多種類のクライアントの利用

所蔵登録専門クライアント，雑誌所蔵データ一括登録クライアント，自動登録クライアント等

### (2) ローカルシステムとの統合

ユーザインターフェースの統一，ローカルシステムへの目録業務の融合等

### (3) 新しい図書館サービスでの新システムの利用

学内 ILL システムの構築と新 NACSIS-ILL システムとの連動，文献の画像伝送システムと新 NACSIS-ILL システムとの連動等

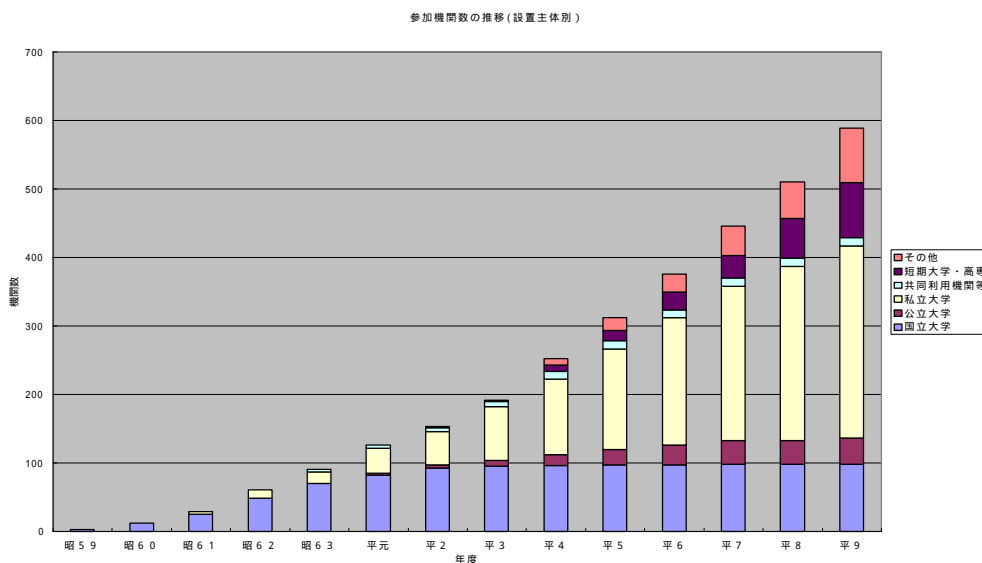
### (4) より便利な目録作成システムの構築

電子メールを新目録システムクライアントと連動させレコード調整を効率的に行うシステム，マニュアルや規則類，分類表や件名表を WWW に載せこれらを参照しながら目録を作成するシステム

以上，今回の研修における配布資料，NACSIS のホームページ上の新システム関連ページ等を参考に，新 CAT/ILL について簡単にまとめてみたが，新システムにおいてはローカル側の自由度が増す分，ローカルシステム開発の負担が大きくなることも踏まえて対応していかなければならないであろう。

## 4. 目録業務の未来

さて，このような状況下で目録業務の現状はどのようになっているだろうか。学術情報センターの目録所在情報サービスへの参加機関は着実に増加を続け，最近では毎年60～70機関増加し平成10年3月31日の時点では597機関となっている。



次に平成9年度の参加機関と全体に占める割合の内訳表をあげる。

(平成10年3月31日現在)

目録所在情報サービス参加機関 (参加機関数597機関)		
	参加機関数	割合
国立大学	98	16%
公立大学	41	7%
私立大学	283	48%
短期大学	56	9%
高等専門学校	28	5%
その他	79	13%
大学共同利用機関	12	2%

このように参加機関の数の増加とともに種類も多様化し、様々な事情を持つ参加機関が共同で目録を作成する状況となってきた。

また、データベースの登録状況は、図書書誌が431万件、図書所蔵が3,151万件となっているが、最近の年間増加数は所蔵レコード数で300万件～500万件となっており、1日に約2～2.5万件増加している。そのうち新規に書誌を登録する割合は1割に満たない程度である。

一方、総合目録データベースに登録されている所蔵データ件数は、全国の大学図書館における蔵書の十数パーセントであり、今後更に遡及入力が必要とされている。

従来、目録は図書館の専門的な職員によって作られていたが、定員削減や人事異動、遡及入力業務の開始などにより、図書系以外の一般事務職員やアルバイト、外部の派遣社員によって作られる例も聞かれるようになった。また、一部の大学では、公立図書館等においてよく見られるような、目録業務の外部委託といった例も見られる。

つまり、かつては図書系専門職員によって作成・維持されていた目録に対し、現在では様々なレベルの人間が作業に従事しており、それが総合目録データベースに反映されている。それはまた、総合目録データベースの充実に伴って目録作業のかなりの割合が、書誌の検索、同定、所蔵レコードの付加、ローカルデータベースへの取り込みといった流れ作業的な業務になった結果であるとも言える。

しかし、流用入力であれ新規作成であれ、書誌を作成する作業は厳然として存在するのである。加えて、レコード修正にかかる手間が大きな問題となってきた現在では、入力されるデータの品質の維持は重要な課題である。この点は図書館員に求められる専門性として大きく訴えていかなければならない問題ではないだろうか。

だが、かつてのように職員が長い時間をかけて経験を積み、育っていくような環境はなかなか望めないのが現状である。そこで、系統だった研修の例として、学術情報センターの目録システム講習会についてふれてみよう。

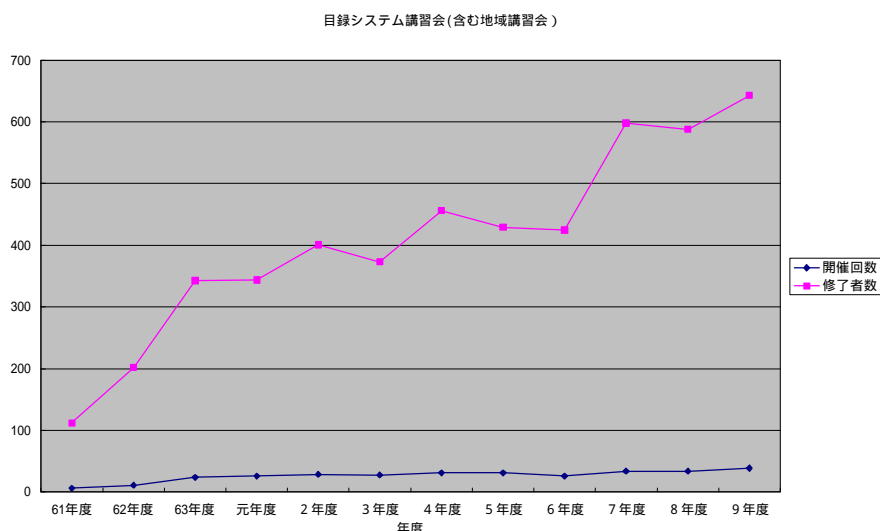
## 5. 講習会のあり方

### 学術情報センターにおける講習会

現在、学術情報センターにおいて実施されている研修・講習会のうち、目録業務に関する一般的なものは、「目録システム講習会」、「目録システム地域講習会」の各図書・雑誌コースである。

これらの講習会は目録システムに接続している機関で、図書あるいは雑誌目録業務を担当している職員を対象に目録システムの運用に関する知識・技術の習得を目的に開催されている。

下記の図は目録システム講習会の開催回数と修了者数の推移を表わしたものである。



「学術情報センター研修事業の年度別推移 平成10年2月19日現在」より

平成7年度からは「図書」と「雑誌」のコースに分けて開催されている(地域講習会では平成8年度から)。これもまた順調に年々受講修了者数を増やしてはいるが、受講修了者数に対する受講希望者数の割合である受講率は、平成9年度で58%であり、目録システム講習会に対する必要性はこれからもますます増大しそうである。

平成9年度から「新目録所在情報サービス」を開始したことに伴い、新しいサービスに対応した図書館システムが導入され始めている。この新しいサービスを対象とした内容の講習会は平成11年度からの実施が予定されている。

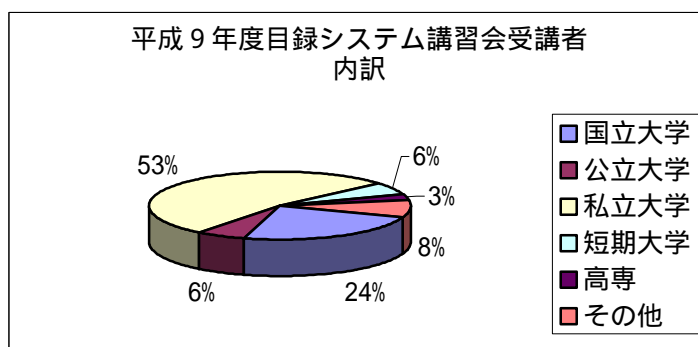
平成10年度は、既に新サービスに対応したシステムを導入している京都大学附属図書館との共催により試行的に10月14日～10月16日にかけて行われる。受講対象者は同図書館で導入されている新CATクライアントシステムである、富士通株式会社製の「ILIS wave」を導入している図書館の各業務担当者である。

今後の講習会はこのようにクライアント毎に開催されたり、共通認識の部分のみを講習し端末操作は各館で、というように変わっていくのかもしれない。

## 現行の講習会の課題

現行の講習会の課題はまず、ここまで述べてきたような様々な事情により、受講者のレベル・習熟度に違いがありすぎるという点があげられるだろう。

下図は平成9年度目録システム講習会受講者643名の内訳を表わしたものである。



実際には、目録業務以外の受講生といったケースもあれば、接続前の館がNACSIS-CATのイメージを掴みたいといったケースなどもあるようだ。そのように多種多様な受講者をひとまとめにして教育することには無理があり、何らかのランク分けが必要ではないかと言われている。

しかし、学術情報センターの講習会、特に地域講習会においては、各参加館の環境の違いや会場の確保など、きめ細やかな対応をするには課題も多い。そこで今後は、共同目録の理念(概論)や目録規則、目録情報の基準といった基本的な目録の話と具体的な端末操作など、内容を切り分けて各館でも研修を計画するといった必要もあるだろう。

## 学内研修の必要性

前述したように、時間をかけて経験を積み熟成されていくような、ある種徒弟制のような環境はもはや望めなくなっている。目録業務に限らず、図書館学全体について専門性のありかを見直し、重要性を訴える必要がある時代になっているように思う。

時間や予算、受講者枠、周囲の理解などの問題もあり、出たくても講習会に出られないケースもある。幸いにして、学術情報センターでは各種のテキストやビデオ類も多数用意されている。さらに自学自習型のシステムも準備されているようである。そういった教材を利用して、各館においても研修や講習会を実施していくことは、今後、書誌レコードの品質を維持し、目録作成者全体のレベルを引き上げていく為には重要であろう。

## 6. おわりに(自学自習の為のプログラム)

将来的には自習の為のプログラムがオンライン上で見られるようになることも考えられてもいいのではないだろうか。すでに学術情報センターのホームページ上では、コーディングマニュアルや目録情報の基準といったものは準備されつつあるから、それぞれにリンクを形成するといった機能を使えば、参照等は非常に有効に利用できるであろう。修

正も楽であるし、修正部分を差し替えるといった手間も省ける。

さらにオンライン上でアクセスできるようになると、各個人の自由な時間に学習できるし、速度も制約を受けない(現行のシステムでは学ぶ側も教える側も時間の制約を受けてしまう)。必要な部分以外の読み飛ばしも可能ではないか。

そしてまた、学術情報センターでの講習会の予習・復習にも使えるのである。

さて、ここまで色々と述べてきたが、新システムに移行が終わった段階でどうなるのか、実際のところ予測がつかないようにも思う。基本的な概念には変わりがないはずだが、何が起こるか分からないのが世の常である。それでもこのような状況であるからこそ、しっかりと講習会や研修を行い足固めをしなければいけないのは確かであろう。

#### << 参考資料 >>

- 永田治樹 「学術情報と図書館」, 1997.5
- 平成 10 年度 総合目録データベース実務研修 配布資料
  - \*平成 8 年 1 1 月 2 1 日に北大で行われた新目録所在情報サービス説明会における配布資料 (<http://www.cat.op.nacsis.ac.jp/INFO/newcat/synpo-94.html>)
  - \*宮澤彰, 次期目録システムの構想 平成 6 年度学術情報センターシンポジウム, 1994.10 (<http://www.cat.op.nacsis.ac.jp/INFO/newcat/setumeisiryo.html>)
  - \*学術情報センターの事業について, 1998.3
  - \*平成 1 0 年度教育研修授業要綱, 1998.4
- 平成 9 年度総合目録データベース実務研修 個人研修レポート
  - \*平井洋, 目録データ入力作業をめぐって : 負担の少ない目録作成作業のための補助マニュアルの構想
  - \*押見智美, NACISIS-CAT における講習・研修のあり方